

編集後記

■新年度が始まり、学生たちがキャンパスに戻ってきました。コロナ禍前は、休みの方が静かだと思っていましたが、今は素直に活気があっていいと思います。昨年4月に現所属に移動したときには、すでにいつでもみんなマスク着用の生活でした。1年経っても、一緒に仕事をしている方々の顔全体を見たことがありません。マスクに隠された素顔を見られる日が早く来てほしいのです。

■お悔みに寄稿させていただきました。書きたいことはたくさんあるはずなのに、いざ書こうと思うとなかなか進みませんでした。計4名が、それぞれの思いを綴っています。違う時代の Menaker Lab の様子を垣間見ていただけたらと思います。編集作業中に気づいた点。海老原先生が留学された時代には電報が連絡手段として使われていたようです。下村さんは手紙を出されています。私は、Eメールでした。時代の流れを感じます。テクノロジーがどんなに進化しても、「生き物」を扱う研究を大切にする姿勢は受け継いでいきたいと思っています。

(吉川)

■コロナ禍に突入し早1年です。幸い私の周りで感染者が出ていませんが、皆様の中にはラボ閉鎖などになってしまったところもあると聞きます。なかなか思うように過ごせずストレスも溜まってきているかと思いますが、今号がそんな中でも息抜きになれば幸いです。

■コロナ禍で世界が目まぐるしく変わろうとしています。高度経済成長やバブル崩壊を知らない世代として、コロナ禍を経験しこういう時に世の中が急激に変化するのだと実感しました。しかし、日本社会の旧態依然としたシステムに辟易してしまう日々でもあります。おじいちゃんたちによる日本統治はもちろん、大学組織では依然として書類の紙媒体提出・捺印が跋扈しています。上の世代は元に戻ろうとし、若い世代は生き残りのため変わろうとする感覚の違いを感じ悶々として研究に逃避する日々です。

■この学会誌が発送される頃には、まだ一般の方へのコロナワクチンの接種は始まっていないかと思います。第4波に突入し早期収束は難しいかと思いますが、早く摂取が広がり今年度の沖縄で皆様とお会いできるのを楽しみにしております。ただ、私が勤める基礎医学の教員はワクチンの優先接種に該当しないようです…。

■次の秋号は東京2020後です。無事開催されるのでしょうか…。

(池上)

■本日、2021年4月6日です。一昨日、日曜日には、桜散らしの雨が降りました。一斉に花開いていたのも雨にもっていかれて、その後、青々とした葉が夏を目指して勢いづいていますが通り過

ぎるひとに花のように愛でられることはありません。日常が傲慢にぐいぐいと押し寄せてきています。この号ができるころは5月病の季節でしょうか。入学式や入社式などの華やかな儀式が終わった後は平板な日常がやってきます。

■今回もすばらしい原稿をご寄稿いただきました。執筆者の方々、できるだけ個人的な話をお願いしますとの無茶な要望に応じていただきました。また、原稿とり、査読、と八面六臂で編集委員会の方々ががんばっていただきました。また、あいかわらず、編集の仕上げの部分は吉川さん、池上さんにおまかせで、委員長が一番仕事してないなあと思し訳なく思います。

■Menaker 博士をよく知る研究者の方々に追悼文をいただきました。悲しみの中、寄稿いただき感謝申し上げます。偉大な学者であったと同時に、発せられた一言一言が、何回も反響して、人の進む方向まで変えていくような偉大なメンターであったことが推し量れます。私自身にとっても博士にお目に掛かること自体が華やかなことでありました。博士は柔らかな物腰の方でしたが、やはり議論をすると緊張する。舌鋒鋭かった。ごまかしが効かなかった。かけがえの無いかたが去っていかれました。

■コロナ禍の世界では、日常生活からはみ出さないことが推奨されます。みながんばっているが、やっぱりつまらない。慢性疾患を抱えたヒトが、食事、運動、塩分制限などががんばって、三ヶ月おきぐらいに血液検査して、よくがんばったねとほめられて、しかし何にもおいしいもの食べていません、と肩を落として語るのと似ています。日常が重苦しい。私、別にお祭り好きではない。ひとりているのは気が楽で人混みを避けて会食もせず日常をすごしている。毎日の繰り返しの中はずぶずぶとはまっていてそれはそんなにつらいことではない。なんか学会も Web で楽ですね。日常の延長。しかしこ一番で力が入らない。なにか足りない。一昨年の金沢での総会、雨がちでしたが、金目鯛つつきながら、四方山話に時間を費やすといったことを毎日やった。また発表の合間の時間に、何人が集まって発表内容や最近の論文内容を評定しながらわいわいとやってそこからアイデアが生まれたり、共同研究になったりする。選層になってようやく、学会や研究会、こういった一種、お祭りのような儀式的性を含む場の必要性がわかりました。それは柳田民俗学でいうところのハレの場ですね。日常に戻って欲しいとこのコロナ禍の中でヒトが訴えるとき、実はそれは、仕事終わりに飲みについて騒いだり、野球場にて大声で応援したり、カラオケで声を張り上げたり、桜の木の下にシートひいて弁当食べながら、時間を費やすことだったりします。すなわち”ハレ”が不足している。このコロナ禍の中で”ハレ”は変質してしまいました。仕方のないことかもしれません。でも本年度は、できることなら直接お目にかかりたいものです。

■(結構”ケ”だらけという親父ギャグを思いつきましたが、控えます。)

(重吉)

時間生物学 Vol.27, No. 1 (2021) 令和3年5月1日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://chronobiology.jp/>)

(事務局) 〒467-8603 名古屋市瑞穂区田辺通3-1

名古屋市立大学大学院薬学研究所

神経薬理学分野内 (担当 佐々木)

TEL/FAX : 052-836-3524

Email : chronobiology.jp@gmail.com

(編集局) 〒589-8511 大阪府大阪狭山市大野東377-2

近畿大学医学部解剖学

重吉康史研究室内

TEL : 072-368-1031

Email : shigey@med.kindai.ac.jp

(印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部